

A 語句の意味と読み

(1) することがなくて退屈だ・所在ない（もの寂しい）／源氏が夕暮れに歩み出る理由になっている

(2) 終止形＝あてなり／意味＝上品だ・高貴だ／尼君の品のよさをいう語

(3) かわいらしい・いとしい／×今の「美しい」。小さいものへの愛情をいう語

(4) 終止形＝今めかし／意味＝現代風だ・今風で華やかだ／「今めく（今風になる）」から。短く切った髪をそう感じている

(5) しみじみと心がひかれる様子で・しみじみと趣深く／「うつくし」と並ぶ源氏物語の頻出の心情語

(6) 成長した先ざき・将来（の姿）／「生ひ先見ゆ」＝将来（の美しさ）が思いやられる

(7) 「あな～や」＝感動・詠嘆（ここではあきれ）を表す言い方で、「ああ～だなあ」の意。「幼し」＝子どもっぽい・分別がない・あどけない。／「あな＋形容詞の語幹（幼）＋や」で感動を表す形。「いで」も感動詞

B 文法

(8) ラ行下二段活用・連用形／接続助詞「て」は連用形に付く

(9) 断定の助動詞「なり」の連体形「なる」に推定（婉曲）の助動詞「めり」が付いた「なるめり」が、撥音便で「なんめり」となり、その「ん」を書き表さずに「なめり」となったもの。／「めり」は終止形に付くが、ラ変型に活用する語（ここでは断定の「なり」）には連体形に付く。だから「なるめり」となる。頻出の音の変化

(10) 完了の助動詞「つ」の連体形（終止形は「つ」）。下に体言を省いた言いさしの形で、余情・詠嘆を表す。／終止形なら「逃がしつ」。「つ」は連用形に付く

(11) 存続（完了）の助動詞「たり」の連用形。「～ておいた」の意。／下の「つ」が連用形に付くので、ここは連用形

(12) 逆接を表す接続助詞で「～のに」の意。ここは下を言いさして詠嘆の気持ちをこめている。文末に置かれた詠嘆の終助詞と説明する教科書もあるので、お使いの教科書の説明に合わせる。／「閉じこめておいたのに（逃がされた）」という不満

(13) 自発（自然と～される）。終止形は「る」で、ここは連体形「るる」。／心の動きを表す語に付く「る・らる」は自発になりやすい

C 主語・指す内容・敬意の方向

(14) 光源氏が、走って来た女の子（のちの紫の上）を、尼君の子であるようと思った。／「見給ふ」の尊敬語から主語は源氏。実際には尼君の孫にあたる

(15) 走って来た十歳ほどの女の子（のちの紫の上）の言葉。／直後に「いと口惜しと思へり」とある

(16) 尼君が、雀を逃がされて泣きべそをかいている少女（のちの紫の上）に向けて言った言葉。／直前に「尼君、」と主語が示されている

(17) 藤壺（の宮）。光源氏がひそかにこの上なく恋い慕っている人。／少女は藤壺の姪にあたる

(18) 謙譲語（補助動詞）。敬意の対象は、似ている相手である藤壺。敬意の主体は、この部分を直後の「と思ふ」が受ける源氏の心の中の思いとみれば源氏、「さるは」以下を語り手の説明（草子地）とみれば語り手（作者）となる。お使いの教科書の説明に合わせる。／「たてまつる」は動作の向かう相手を高める（動作主を高める「給ふ」と区別する）。直後の「と思ふ」をどう見るかで、敬意の主体の答えが変わる

D 口語訳

(19) 雀の子を犬君が逃がしてしまったの（ですよ）。／犬君は少女に仕える童女の名。人名として訳す

(20) たわいなく（言ってもしかたがないほど子どもっぽく）いらっしゃることよ。／「ものす」＝「ある・いる・する」の代わりに使う語／「かな」＝詠嘆

(21) 成長していくような様子が見たい人だなあ。（「む」を推量ととって「成長していくであろう様子が見たい人だなあ。」も可）／体言（さま）に続く連体形の「む」は婉曲（～ような）と教えるのが一般的だが、推量（～だろう）とする教科書もあるので、お使いの教科書に合わせる

(22) （その人に）たいそうよく似申し上げているために、自然と見つめられるのであった。／「が」は「～のが（理由で）」。

直前の「さるは（というのは）」から、目がとまった理由を述べている部分。「まもる」＝じっと見つめる

E 内容・記述

(23) 雀の子を伏籠に入れて飼うほど生き物をかわいがり、逃げられたことを泣いて顔をこするほど本気で残念がる、あどけなく感情のままな子ども。その幼さが、のちに尼君にたしなめられることにつながっている。／⑩の「ものを」＝～のに。大事に閉じこめておいたのに、が不満の中身。顔が赤いのは泣いてこすっていたため

(24) 自分の命が今日明日とも知れないのに、少女はそれを何とも思わず雀を惜しがり、生き物を捕らえるのは罪だといつも言っているのに聞き入れないから。／「今日明日におぼゆる命」「罪得ることぞ」が手がかり。※尼君は自分の亡きあとの少女の行く末も案じている（のちの場面）

(25) 少女が、源氏がひそかにこの上なく恋い慕う藤壺によく似ていたから。会うことのかなわぬその人の面影をふいに目の前に見て、思慕とせつなさがこみ上げ、思わず涙が落ちたのである。／「さるは」＝というのは、で理由が始まる合図。⑭「限りなう心を尽くしきこゆる人」＝藤壺を指すと分かれば書ける。会えないその人の面影を見た、という心の動きまで書く

F 文学史

(26) 作者＝紫式部／時代＝平安時代（十一世紀初め・平安時代中期）／同じ作者の日記に『紫式部日記』がある

(27) 五十四帖／五番目（桐壺・帚木・空蝉・夕顔・若紫）／巻名の順は、冒頭の四巻だけ覚えておけばよい

(28) 歌物語／『伊勢物語』（『大和物語』も可）／作り物語＝『竹取物語』『源氏物語』など

【現代語訳（全文）】

日もたいそう長く、することもなく退屈なので、（光源氏は）夕暮れのひどく霞んでいるのにまぎれて、あの小柴垣のところに歩み出なさる。供の人々はお帰しになって、惟光の朝臣とのぞきなさると、ちょうどこの西向きの部屋で、持仏をお据え申し上げて勤行している尼であった。

四十歳過ぎくらいで、たいそう色白で上品にやせているけれど、顔つきはふっくらとして、目もとのあたりや、髪がかわいらしく切りそろえられている末も、かえって長い髪よりもこの上なく今風で華やかなものだなあと、しみじみと心をひかれてご覧になる。

こざっぱりとした大人の女房が二人ほど、そのほかには童女たちが出たり入ったりして遊んでいる。その中に、十歳くらいであろうかと思えて、白い衣に、山吹色などの、着なれてやわらかくなった着物を着て走って来た女の子は、たくさん見えた子どもたちとは似ても似つかず、たいそう成長した先の姿が思いやられて、かわいらしい顔だちである。髪は扇を広げたようにゆらゆらとして、顔は（泣いて手でこすったために）たいそう赤くなって立っている。

「どうしたのか。童女たちとけんかをなされたのか」と言っ、尼君が見上げた（その顔に、少女と）少し似ているところがあるので、（尼君の）子であるようだ（源氏は）ご覧になる。（少女は）「雀の子を犬君が逃がしてしまったの。伏籠の中に閉じこめておいたのに」と言っ、たいそう残念だと思っている。

尼君が、「まあ、なんと幼いこと。たわいなくていらっしゃることよ。私がこのように今日か明日かと思われる（先の短い）命であるのを、何ともお思いにならないで、雀を恋しがりなさるとは。（生き物を捕らえておくのは）罪を得ることだと、いつも申し上げているのに、情けない」と言っ、「こちらへ」と言うと、（少女は）ひざをついてすわった。

（源氏は）成長していくであろう様子が見たい人だなあと、目がおとまりになる。というのは、この上なく心を尽くしてお慕い申し上げている人（＝藤壺）に、たいそうよく似申し上げているのが（理由）で、自然と見つめられるのであった、と思うにつけても涙が落ちる。